

科学エッセイ

研究費の確保

金森 仁作

平成元年11月、国立長寿科学センターは、愛知県に設置されることが決定しました。厚生省で、目下このセンターの組織・内容・規模など具体的な検討がされていますが、誘致運動の一翼を担った一人として、一日も早く、建設が始まり、医療と研究が一体として運営され、世界に冠たる長寿国日本に相応しいセンターとなることを期待しています。

このセンターの設立に先だち、センターの活動を側面的に支援をする財団法人長寿科学振興財団ができ、長寿科学の研究や若手研究者の養成事業がスタートしています。

私は、行政官として約30年の間、多くの大型研究プロジェクトに係わりをもち、多くの研究者と出逢いました。

研究者にとって、研究のための立派な施設設備と十分な研究費が用意されることにこしたことはないのですが、つくづく「研究は人なり」と思い知らされました。

研究は、基礎・開発・応用（実用）の三段階に大別できますが、遺伝子組み換え技術を使った研究などでは、どの段階か判然としないし、できないものがあります。常にどの段階のものか念頭に入れておくことが必要です。

研究を始めるに当たって、研究者・研究課題・研究の必要性（主旨）・目的・研究方法・期待される成果などを明確にしておかなければなりません。

新しい研究の予算を要求し、獲得するために誰もが苦勞するところです。研究内容を判り易くかつ簡単にすることが大事ですが、これは大変難しいことです。

このため専門的用語には、わかり易い解説をつけることですが、これが難解で、またまた解説を加えなければ理解できぬ代物もあります。がんの場合、「がん」という病気についての説明であり、「転帰」という用語の解説などです。専門家にとって平易なこと、また常識と思っていることが十分に理解できないため、研究の必要性や重要性が理解できないこともあります。書き物の場合は、

読める字でなければなりませんし、達筆の手書きでなく、タイプ印刷が読み易く、親切でよいものです。

個別研究・共同研究あるいは大型プロジェクト研究であっても、この研究を「何故」・「今」しなければならぬか？ 或は、する必要があるのか？という問いは簡単なようで難解なものです。

病気の場合であれば、その病気の有病率・罹患率・死亡率・致命率・合併症・治療期間・医療費などがどのようになっているかです。

研究が、日本あるいは世界のなかで、どのような位置づけにあるのかも大切なことです。

費用対効果も大切なことですが、とりわけ、研究成果がどうなるのか。病気の発症機序・診断・治療法にどのように役立つのかも解かり易くすることです。

最近、大型プロジェクト研究が増えてきました。共同研究ということであっても、よくよくみると、ただ単に個別研究を寄せ集めたに過ぎない共同研究もあります。

共同研究のねらいを明確にしておいても、オルガナイザー・コーディネータが、よほど気を配り、しっかりしていないと、組織的な一体的な共同研究が推進できません。

共同研究班を発足して、数年してやっと共同研究らしい組織ができるものです。研究には研究者があつて始まります。

研究者の研究歴・実績や学会における評価が、どうなっているかは大事なことです。研究者の論文、ポスト、年齢なども参考になります。

また研究者の人柄や研究に対する意欲は大層だいじなことですが、これは直接本人に会ってみないと判らないし、かなり主観的判断になります。

研究者のボスは必要ですが、その存在が研究にとって邪魔になることも、まま有ります。ボスが研究を私物化し、公正で公平な組織運営ができず、成果が上がらないことがあります。こうしたボスを排除することは大事なことです、勇気がいります。しかし、肩たたきを果敢に断行しなければなりません。

研究には「遊びの心」が大事です。行政官は、往々にしてせっかちに成果を求めます。「成果はどうだ」といっても、新しい発見、発明は容易に期待できないのです。「〇〇賞」「××賞」に値する成果には滅多に出くわさず、逆説的ですが研究者の予想した成果がでないとおもっておいた方が、期待を裏切られなくてよいといっても過言ではないのです。

しかし、成果があがらないと研究費が打ち切りになります。

研究者は、あまり好みませんし、また下手ですが、研究成果を大いにアピールし、宣伝することも大事です。

植物には「種」「葉や茎」「花や実」という成長段階があるように、研究にも進行・発展段階があります。植物に適した土壌・畑が必要なことはもちろんですし、またしっかりと根を張らないといけません。

研究や研究者も植物と同じです。なんとといっても「種」が最も肝腎です。実績のない若い研究者は、良い「種」か悪い「種」か判別できませんが、将来のため危険を覚悟して、できるだけ沢山種を蒔くことです。その中でいくつか芽を出し、根を張ります。「葉や茎」が大きく立派でも、花が咲き、実が成らないこともあります。いつも余裕(ユトリ)をもち「遊び」の精神をもつことです。研究や研究者をみると、種を蒔き、芽をだした段階か、葉や茎が成長する段階か、花が咲き、実が成る段階か、よくよく見極めることです。成果を急がねばならない時は、手っとり早く花や実の成る直ぐ手前の研究や研究者を探し求め、そこに必要な研究費を投入すれば失敗する危険が少なくなります。

実のある研究成果をあげることは大事なことです。が若い将来の研究の担い手を育て鍛えることもだいじです。そのためにも、それぞれの発展段階にバランスを考えて研究者と研究費を投入しなければならないのです。

わが国は研究費が少ないと研究者は嘆いています。開発・応用研究に重点が置かれていることも事実です。

わが国は基礎研究者は住みにくい国とあって、優秀な研究者が、祖国に見切りをつけ外国に天地を求める頭脳流出もみられます。

わが国にとって、「人材は最大の資源である」ことから、頭脳流出は歓迎すべき現象といえますが、基礎研究あつての開発・応用研究でありますから、研究や研究者にも「遊び」が求められます。

国立長寿科学センターの誕生は、老化や老人病の研究を加速し、若い研究者を刺激し、育てることでしょう。愛知が、世界に冠たる長寿科学研究のメッカになる日も遠くないでしょう。

(防衛庁衛生担当参事官 前愛知県衛生部長)